

NODAK
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

NODAK Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

諸國里人談

三

ル 3
3035
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

長



諸國里人談卷之三

五山野部

○	○	○	○	○	○	○	○	○
富士	阿蘇	焼山	雲仙	白峰	風穴	土圍子	室八島	野守鏡
駿河	肥後	陸奥	肥前	後波	和泉	甲斐	上野	大和

○	○	○	○	○	○	○	○	○
浅間	妙義	立山	彦山	洞窟	風穴	土饅頭	外水	阿漕塚
信濃	上野	越中	豊前	若狭	甲斐	周防	越前	伊勢

○短尺塚 陸奥

○黒塚 武藏

六 光火部

○火の辨

○不知火 豊後

○橋立龍燈 丹後

○焚火 隠岐

○分部火 伊勢

○二根坊火 抄津

○虎宮火 摂津

○蹉陀龍燈 土佐

○野上龍燈 周防

○光明寺龍燈 相模

○狸火 摂津

○姥火 河内

○秋葉神火 遠江

○千方火 伊勢

○狐火 京

○油盗火 魚江

○入方火 越後

○寒火 吳国

諸國里人談卷之三

菊岡采山翁著

五 山野部

○富士

駿河國富士山の相傳は孝靈帝五年に一夜に地折て大
 湖となり是江列琵琶湖に其土大山となり駿河の富士乞
 し江列三上山の巔より溢る成故にそ飛船とてそ毎年
 六月登とすそ百日の潔斎し江列の人七日の潔斎しそ
 心のまろ付込江の土を齎す則禱るとそ 富士の山を
 五嶽のついでし神さびてそそとそ海河なる如しの
 なる根を天の糸よりそけえとそそそそ日れ新もかくらび
 ても月の老りもそそそなるもそそそそはくはくしそ

雪の深きりゆりつきのつきのゆらんゆりの根を
 秀吉公朝鮮と征す所を後清正元良哈よおのく一命を捕り
 名を世流魁宇瀬と云元日本松前の人なり月報一清列
 島あり年二十年し清正愜く導り改て後後正命と号
 次郎と云此地天賦白崎の富士心をえりて甚し
 又胡蝶人本朝の時濠河を富士城としてけの越島より云
 九月本に富士よりきまひ二つあり一つは奥列津燈弘前あり
 岩磯と云るあり飛富士に達りた
 又落列類娃那子高山ありつる月報と云又富士より
 さらぬと報の船のつる月報ありはけくの富士よりん

按茲と見ると朝鮮より大甲のころゆりつきの
 ○ 浅間

信列浅間嶽の佐久郡し嶺常に燃る崖背たすは焼る
 時吹出ると云ふとて軽井沢掛の日の曠原に焼る
 浪り船くありと云ふ毎年四月八日潔斎して登りする
 たり人皆竹の筒と水と舟へ草鞋と浸して大丸を
 踏ぐ候に杖藜より四里は出るといふと佐久郡の
 多摩郡の山内なり上列より唯氷作すを自然と云は
 九四里ほどあるし作より軽井沢へは半里ぐらしかに
 上りて考す上列地より嶺すく九八里の高ふなり
 富士に登るより九里しゆのそかりた

是の巖とくしの行合とてぬりまうりて巖のやうに足申りし或云人の
えに目とりまうり水柄とらまうりくかく待りる嶺山の痛はく言
人の其心持く剣し又京本末なすの寛かうり水のしと申りし
人の心を柔くし江戸大坂なすの曠野大河の流を飲人を至る
廣しとらまうりその理をたしとらまうり
おんまうりく待りるまうりくやびりし心 嵐雪
却のこの悠かりまうりくまうりくまうりく

○焼山

陸奥国南部領八戸にいらし大畑とらまうり登りて三里半
けの時として焼く事ありまうりてまうりてまうりて大畑の地
二十体の石地蔵あり中まうり長五尺あり他はまうり小併なる

よりて人の心とて取云りて僅はありまうりて近きところ園堂と云
傍ありて修補し今千体に満り巖に地獄と云ふあり
三塗川塞河原と云ふ塔を作る修補た地獄の面これ
石に凡長二十五丈幅六丈其まうり血色のまうりなる
もの敷り際りし釵のひるまうりまうりく尖りまうりく刀鋒と連り
比らまうりまうり藍屋の地獄酒屋麴屋の地獄といふ
まうりくの色とわらりまうり 茲に拍巻と云わり石の部を見

○立山

立山の越中府新川郡に祭神伊弉尊力尾社に千力雄
命とて是神の大宮し此より絶頂まで十三里余其間四
多し此嶽は佛尊の貌に似たり膝と一の越と腰腹

と二の教肩と二の越頭を四の越頂上佛面を五の教と
 以市の谷乃道に小連大連とて種に継りて先と西と
 は連三條小教治り作りありて地獄道に地蔵堂あり
 毎年七月十五日の夜地獄堂ありていふた出く衆をふ
 おとと積聖市とら令し一教より五ノ教まで各堂あり一字
 一石のに暖がる世あり堂と九品とら令し作人杖草鞋と
 措く本杖と参りし

地獄谷 地蔵堂あり 八大地獄 各十六の別あり 一百三十六地獄
 血の池い水色赤く血の赤く一雨くは猛火燃立て黒言
 號法の教聞へておそくしきありし極し水に鉄の心あり
 岩石守りし鋒の心く 煥准言の絶り

俗に云は心はで形を思ふ人の七聖教の果しくは足事とて
 元祿のころ江戸牛込小池何某日行三人禪定しるに
 海邊の教く時行をきて道の色の本陰に一燈をあり
 ありしと合儀しと長言に誰人とも去るはあましく同老成
 合事まのそんと概に多く燈を白一燈を失失さるけ
 ぬしと何かおとくけり三人あましく合し一燈をよ
 しなびけりし舟に人あわそを看せしするはあましく
 そ相争しなるとひてあましくの概をぬんと急げられ
 人倫するあましく人あましくやうくけりて一里とるけり
 五七軒の里あり或る舟子入る湯茶と夜けあましくの事とある
 いその意と中く人里なくとて件の概とあましく足さるけり

主無波海一のまゝにやがる家の息が統し順日を今期
一七日たらくこの家に付ひりてまゝにを治りせんを
大に此歎一報候をまゝに思ふ候しけるよし

○雲仙巖

肥前國高木郡の高山五十町上よき菅賢巖あり山常に
燦て巖の若りゆ事ありて此巖と移るあり穴敷十あり
ありまゝに高五六尺黒煙の涌るるなり此巖と云
酒屋の地獄の白濁く和沖に候り酒屋の地獄(黄
白に音き土涌鞠の色のまゝ)藍屋の地獄(青流に
藍にわたりまゝ)の色のまゝに候りて其のありやる猛火窟に
して等活大魚熱とも云へし其流稍熱にして湯のよ

とく如るに小魚まありあり奇なりといふ禁に温泉あり
入湯の人常に候し○當山の伽藍は文政帝宝元年中修基
築刻の如日本の大乗院満明密寺とあり三千八百坊を
塔十九基ありし天正年中耶蘇宗門盛に修
僧俗神法子隔時多寺の僧侶亦あり周り修修せり目して
正法子修せりもの塔の地獄に墜入し今礎を佛の
僅にありやりに一ヶ寺の候あり

○彦山

豊前國田川郡にありて其を後海系に其根踏て大出
十の谷四十九の窟あり才一の谷と玉谷とあり靈泉涌出
と候と満痛と候と云へし又其泉をわたりけ水濁り云

三の嵩の嶽の末とく三神跡と云ふ北岳天忍總根と申す
 伊弉册尊南岳伊弉册尊と性古より守後入をの山に
 金多井より守事六十二町と云ふ元二月十五日

○白嶽

讚岐國河野郡人王七十五代崇徳院を視る今此靈氣
 つのくゆしく様々の奇技類一宇津流は松山の左邊に
 一財松の浦少く流るる子貝と拾りせ給ひて

松山の松の浦風吹りせとびろびて云のへ意をせ給ひ
 と強一給ひ一よりは浦の貝に松の字の字と現すとて
 奇を忘見と号を長寛二年に所室第四十六番子
 しては而めく崩落一給ひ一と西行法師養徳の御

陵崎動凡千時む秋流して絶められと静まらばとて

すやまむのの森とくもかろん何よとせむ

○洞穴

若狭國小湊の空印寺八百比丘尼の住一而く別沙乳
 あり候に洞穴あり其奥かざり云々凡土人云當り五六世
 公家の住僧去の穴に入てその奥をたぐるに三日と経て舟渡
 乃山中に如らると云りお傳ふむ一女僧ありては而く住
 八百歳にして其容貌十五六歳の壯美しよめて八百比丘
 尼と稱し聖傳子云は女僧人魚を食し一も少人に
 長生なりと云り○又武藏國足立郡水波田村慈眼寺
 仁王門の傍に櫻の伐株あり圍り二丈あり是を

安んじとありて天統の八百比丘尼の裁るるありしと云々
たり然に又振出の他善くあり近年土中より
振出るるありしその不撻に八百比丘尼大化元年
と雖も大化の三十七代孝徳帝の年号にして寛保
内々九一千百余年なり

○風穴

泉州和泉郡牛滝山に岩窟あり深さ量なり常
烈風ありしゆて風穴と号し高山の役行者の草創なり
弘法大師惠亮和尚の經歷する所なり大威徳寺といふ
大瀑三つあり一の滝二丈二の滝十丈三の滝四丈
叡山のお亮和尚はははく大威徳の法を修せしに

時大威徳寺の三の滝より出現ありしと云々其のありし
て伏せるありし其長更なりて牛滝と云風穴の法を修し

○風穴

甲斐國が延びしに叢父と云なり日蓮上人開基の後
身延と云び高の新度之節に代の孫南部六郎実長の
所創し板野沙牧波本井二所の所を以て坂本井友と稱
上今油依一と云ふと雲梯とせりしに一病は法修多し
雨ふれく叢父の堂の垣を以てまをらしと初らるる
は谷と云ふり谷と云ふは雨より初るるを以て法修の
堂と云ふり題目堂のありし風穴ありと云ふり此は尖
りて控襲しる事ありて肌を以てぬく事ありしに穴

信列後乃へ登りぬゆえりと云り、いふ所へは後乃の神体あり
乃宝物あり、七西のいまうらふ事三里巔に大きき池あり
その形曲龍の如く、一層より涌出泉し其水の清く、春氣滝
と云百丈の自布とゆへり、さき天竺を熟池の水ありと
いふは池を七姉と云り、さき事、八身延龍にゆり、後乃有

○土園子

甲斐國巨摩郡園子新井と云ふ所の嶺に土園子
と云あり、火の大小あり、と云の當子の如く、丸きあり
すこお角がらり、もわりあり、色はうと黄色に、して土
粉を衣せし、ひらりと割れ、中に黒き土、鐵の如く、よ
あり、焚く時、あつらふ、沙石の如く、

○土饅頭

周防國吉敷郡高原氷上山の叡山を後、さき靈地
なり、びと、米石、餅石、土饅頭と云あり、土中より掘り、
さき、と云、天行病を治さ、瘡あつらふ事、神如く、びと、
毎年二月十三日、北辰尊星の祭あり、日本才一靈験の
あり、大祭し、千種百味を供ふ、多し、良家代、一子余歳
祭り、舟も、運の祭と云い、是し、多し、良家の子、余歳、乃、内、
年毎に、日、土、海、り、流、中、し、天文十八年、より、星、も、さ、り、流、る、
大内義隆より、い、祭、勢、流、に、その、箭、の、祭、供、土、石、と、云、て、土、中、に、埋、れ、
し、と、云、り、○大内家、の、山、陽、の、大、守、者、岡、山、口、の、城、に、住、み、
相、續、り、家、を、國、中、の、嶺、に、都、に、移、り、

塚漕阿

水迹



○室八嶋

下野國熱社村室八嶋明神... 野中に法水あり其水乳之生て...

在野野にあり... 中野の西伐... 野を治野と...

櫻かり芝ふし小卒^{まがら}合^あるに河^か岡^{おか}猿^{ざる}尾^お龜^{かめ}井^い等^らの付^つ死^しの
跡^{あと}に松^{まつ}を栽^{たくわ}てむじとゆせり一^{ひと}とせ芭^ば蕉^{せう}沙^さ抄^{せう}の
夏^{なつ}草^{くさ}やつりとのととつ夏^{なつ}の跡^{あと} 芭^ば蕉^{せう}
市^{いち}の門^{かど}人^{ひと}はま^まん^んう^うと^と茲^{こゝ}に埋^うる^る碑^いを^をま^まけ^け祭^{まつ}り^り遊^{あそ}び^びて^て松^{まつ}天^{てん}
塚^{つか}と^と彫^うり^りて^て今^{いま}に^に存^{ぞん}在^{ざい}

○黒塚

武彦^{ぶげん}國^{くに}足^あ立^{たち}郡^{ぐん}大^{おほ}久^{ひさ}野^のの^の中^{なか}に^にあり^り又^{また}奥^{おく}列^{れつ}安^{あん}達^{だつ}郡^{ぐん}も
あり^りま^まれ^れと^と東^{とう}光^{こう}坊^{ぼう}惡^{あく}鬼^{おに}退^{たい}教^{きやう}の^の地^ちに^に玄^{げん}亮^{りやう}の^の足^あ立^{たち}郡^{ぐん}と^と本^{ほん}
下^{もと}に^にあり^り則^{すなは}ち^ち東^{とう}光^{こう}坊^{ぼう}用^{よう}基^きの^の寺^{てら}に^にあり^り今^{いま}ハ曹^{そう}洞^{どう}宗^{そう}
紀^き別^{べつ}郡^{ぐん}智^ち智^ち記^き深^{しん}に^にと^と玄^{げん}亮^{りやう}國^{くに}足^あ立^{たち}郡^{ぐん}の^の地^ちに^にあり^り近^{ちか}教^{きやう}と
あり^りて^て奥^{おく}列^{れつ}の^の事^{こと}ハ^ハ又^{また}ま^まれ^れと^とし

六 光火の部

○火の辨

陽^{やう}火^かの^の金^{かね}を^を憂^{うれ}ふ^ふの^の大^{おほ}石^{いし}を^を擊^うつ^つの^の大^{おほ}木^きを^を撥^はく^くの^の火^か是^{こゝ}地^ちの^の陽^{やう}火^かなり
大^{おほ}陽^{やう}心^{しん}火^か聖^{せい}精^{しやう}邪^{じや}火^かの^の天^{てん}の^の陽^{やう}火^か君^{くん}火^かの^の人^{ひと}の^の陽^{やう}火^か○中^{ちゆう}火^か
石^{いし}油^{あぶら}火^かの^の陰^{いん}火^か邪^{じや}火^か雷^{らい}火^かの^の天^{てん}の^の陰^{いん}火^か相^{さう}火^か下^げ火^かの^の陰^{いん}火^か
陰^{いん}火^か六^{りく}の^の陽^{やう}火^か六^{りく}の^の天^{てん}の^の火^か十二^{じふに}なり^り又^{また}狐^こ触^{しよく}齋^{さい}齋^{さい}螢^{えい}蟻^{あぎ}蟻^{あぎ}の^の
火^かハ^ハ大^{おほ}き^きな^なり^りと^とあ^あり^り連^{れん}修^{しゆ}め^めく^く他^たも^もの^の火^かと^とま^まし^し色^{しき}
者^{もの}く^く燭^{しやく}な^なり^り寒^{かん}火^か陽^{やう}燭^{しやく}鬼^{おに}燐^{りん}金^{かね}銀^{ぎん}の^の粒^{つぶ}氣^きの^の火^かハ^ハ陰^{いん}火^か也^{なり}
物^{もの}を^を焚^やけ^けば^ば又^{また}石^{いし}灰^{はい}桐^{とう}油^{あぶら}麦^{むぎ}糠^{ぬか}馬^ま糞^{ふん}鳥^{とり}糞^{ふん}より^{より}出^でる^る火^かハ^ハ陽^{やう}火^か也^{なり}
もの^{もの}を^を多^たく^くし^し雷^{らい}火^かハ^ハ天^{てん}の^の陰^{いん}火^かなり^りと^と物^{もの}を^を焚^やけ^けば^ば陰^{いん}火^か中^{ちゆう}の^の
陽^{やう}火^かなり^り淺^{せん}間^{かん}河^か蘇^そ雲^{うん}仙^{せん}燧^{たい}の^の火^かハ^ハ砂^さ石^{いし}を^を撥^はく^くと^とす^す

陰中の陽火なり○本草綱目ニ云田野燐火人及牛馬兵
 死者血入土年久所化皆精靈之極也其色青狀如炬
 或聚或散來逼棄入精氣下略

○不知火

豊後國美古郡甲浦の後の森より棚灯のおくまの火
 神更のともより出る海に松ぶらりかよふの火を空
 中より合氣サキマと云くは海の中へ飛ぶと云ふ又海を七
 の海合ウチノウミと云くは火時拾ヒキあひて後出ると云ふ
 入なり四五八月九月の間の松の火は火の火の火
 今は火の海に云々なる

○橋立龍

丹後國興謝郡天橋立は毎月十二日永半に於る丑寅の
 沖より龍燈現し文殊堂の方いづれも堂の首ウチノカに
 の松ありこれを龍灯の松と云ふ正五九月の十六日の夜に
 空より一燈くぐるを天燈と云ふ一火ありを
 伊勢の沖燈と云ふ○切戸文殊の海中より出イセノウミ現イセノウミ關イセノウミ浮イセノウミ檀イセノウミ金イセノウミ
 の像なり拾芥抄ニ云智恩寺丹後九世戸文殊天龍
 六斎イセノウミ供イセノウミ燈イセノウミ唯イセノウミと云ふ松並の林海中イセノウミくイセノウミ出イセノウミと云ふ東西
 二里南北二所わたりわたり南へ入海して船を渡す
 その名四所余わたりを佳景の地日本三景の其一つ也
 夫よの海に火の海と云ふは世に云ふ海に云ふ

○焚火

隠岐國の海中に在大海と云ふ所にて是焼火捨次の神靈の神靈し
此神の波を燃ゆ事しりる事ゆへに神の靈は神の靈
たりぬ神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
を燃ゆ事ハ海と云ふ神大現と云ふ神を燃ゆ事なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
わくしりぬ神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈

我々も新造の海にわき浪風なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈
は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈は神の靈なりて神の靈

焼火の神を改め雲上寺と号す也

○海部郡島前美田庄より一條流の流るに海部より
出流し流る大山権次又離大権次と云ふ奈神大日靈貴
○一日此乃天照皇太神之垂跡同一而於今海船多
免漂災者因神火光最不可疑

○分部火

伴勢國津津塔世の川と分部より小き枕打はるる日
火五十も百も一處より一處に流るる後五六人ほど
一々海よりなるに塔世川を今も流るる氷よりなり又塔世
浦に鬼の地蔵の火よりありけ大甲より老嫗の籠の火よりあり
るけるかの川との火より合入るる火なりて

お國の御時なり少時して又やんまの御りそのくらし
ついでてひまの津のくまの川とく奔なり

○二恨坊史

松津田高柳庄二階堂村の火あり二月の頃より二十七日まで
つる大さ一尺とくり家の棟木の柱木の枝梢にと高の連く
又もて服耳鼻口のかしらありてさきし人の面おも
雙をなす事あり福を人氏しておそむびしけ
日光坊より山伏あり他法他よあるより村長が毒病の
日光坊より加指をせける國より入て一七日新より別病愈
なり後より山伏と女意通なりともいふて山伏と教
てら病平金の忍も餅せだその人教害に二の恨喜大

と阿つかの火の掃子毎束を束て長城より影しけるなり
日光坊の火とくまを二恨坊の火とくまし

○虎の宮火

松津田高柳下郡別府村の虎宮の狐といふ名より火行ふ
村の樹のくまよりまの火の勢なり而後よりかみけりり
おとくまの火の勢なり而後よりかみけりり
消るなり虎又奈豆破文ともいふ是則希あり奈の日光
坊の一族其胞を奈の神といひてくら信託あり又云是喜或
揚列武庫郡各次補と云ふなり

○嗟蛇龍蛇

土佐國幡多郡流泥押 高知より西三里 流泥明神は天姥龍蛇

土佐守忠義ちかよしの義上ぎじょうの舟ふね延のびとらふ諱いひなまも列らもお同おなしと云いひ
曾もろ院いん洛らく山さんの中なか兼かね浙せつ江かう省しやうの橋はしはく寧ねい波は府ふの周しうなりと云いひ
梅うめ岑さん山さんと云いひ觀くわん音おんの津つ去きし日本にっぽんの僧そう慧えい華かと云いひ西せいと云いひ
基きに比ひ為ゐ今いまれ也なりかのも住ぢゆうと九州きゆうしゅうより二百五十里にひやくごじゅうりあり

○野上龍燈

周防國すおうのくに野上庄ののののえ龍燈りゆうていは毎年まいねん十二月じふにがつ毎日まいにち丑うしの刻ときに
龍燈りゆうていを又また西にしの方かた五里ごりの所ところにおかす龍燈りゆうていの口くちとつとつと云いひ矢や
を射いるあましく花はなある神火しんかあり里人りじんもと洋やうして紙かみ毎まいに

○光明寺龍燈

相摸國さうもくのくに龍りゆう念ねん光くわう明めい寺じの神火しんかは毎年まいねん十夜じゅうやの月つき一いちあ夜や
龍燈りゆうてい現げんはくろみ海上かうやう雲うんはくろりて尺しゃくありし

○狸火

松津國まつづのくに川かわを郡ぐん東とう多た田た村むらの輶き輦げん子こ燐りんありは火か人の容よう
わつりあつた牛うしと宰さいて火かを擡たへりしあまを去さる人ひと
そ火かを去さて烟えん草そうとのそくお伊いの石いしのそく一いつ首くびを害がい
とあはれおくし雨あめあまおとし石いしの人の狸火りびりと云いふ

○燒火

河内國かみのくに平岡ひらおかに雨あま夜よは一尺いちしゃくとろりの火かの玉たま迫せま脚あしに飛と行りは
お伊いの昔むかし一人ひとりの燒やあり平岡ひらおか社の神かみ火かの油あぶらとあ毎まいに盛さか
死し後ご燒や火かとくたると云いふあつたあ焼やたよと云いふああ
かの火かを去さて面めん衣えも去さる傍かたて倒たふして溜ひたはく尺しゃくも去さる勢いきほのそと
くのそくし紫むらさきと叩たたきあつたあ思おもはく遠とほく尺しゃくも去さる國くになる火か

なりあまきりくく 鷓鴣なりと云

○秋葉神火

遠江國秋葉村より夜玉のあまの火を採りておく
空を照らす沖の方へは光りてあり主人を宿の
源わりのと云り將て其二三日の浦の漁獲するに

○千方の火

勢列を志那家城の里川俣川の氷より挑灯をたす火
川の流よりとせしむる事水よりとせしむる事千方の火と云
びく岩の千方の火よりとせしむる事千方の火と云
今も存する所なり藤原村の場村丸内村三々九二の丸丸
と云村より今九七の丸の丸と云千方の火と云今見大相神

○狐火玉

元祿のはじめの頃上系の人東川へ在りしやと云細を歩
ける加茂のきりて狐火の目と云人歩りしと云りおき細
を歩りしと云り一歩の歩りしと云りぬ細の内に光るもの
ゆりしと云りしと云りその光り細く細くありありと云り
を足すしと云り色と白く鶏の卵のまくと云り昼光と云り
今も釋りて夜にのちり挑灯の光りしと云りせしと云り
と云りしと云り我手室と云りしと云りしと云りしと云り
又夜川より出るか玉を採りて入村のかけて細と
折りしと云りしと云りしと云りしと云りしと云りしと云り
と云りしと云りしと云りしと云りしと云りしと云りしと云り

漸く火をくぐれしゆく火を御して玉の御二言はじりた
光りありおとすりくく口母く細を揮て走りぬ
海より海までしてむら〜く阿らぬ

○油盗火

近江國大津の八冊に玉のあ〜くの火堂横に飛行せぬ事
よかす〜れあり土人の云じ〜志賀の里に油と煮るもの
あり事毎に大は止の世産の油をぬき〜るその若死
魂相を〜りて煮むの火今に流し〜し

○又叡山の西の林に夏の夜焼火が山を油坊とらふ
風流ちよ洞〜七條朱雀の道元が火をねけ勢ひなり
あまも信ふに多くあり

○入方火

越後國蒲原郡入方村庄庄長あ〜と云村長の居宅の座の火の
燃ゆる穴あり常に不白と云蓋と云其白の穴より旗松のふ
〜〜〜〜〜て赤丸を光〜焼火に十倍に夜に近隣の火
子大竹と云笑〜〜あお〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
わ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
堂室なり寒火〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○火渡布

え縁の〜長崎の住〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
茶室の地〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
南省の南海に火〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

その中に荒あひて火を喰うて元長く細くして糸の如く提
て水中に今を別死とてその毛を紡績して布は織る
拵つる白時火中今赤を焼く流るる赤の糸
唐はもは布を執奔一ゆるるや滑明我々の時明朝
困性那と味方のれじに救の室を焼くるその中に元一なる

○寒火

本草綱目云南海の中に蕭丘山あり上り自然の火
春生一夏滅と一極の木と生に但小焦黒色し又云
火山軍其地無穀する事深く入時則烈燄あり
種梅子始に赤寒火し矢乞我後入方の火の影ひし



里人談 三終

